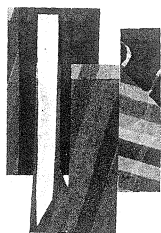


# 文化庁月報



1985-4

No.199

## 【表紙】

唐獅子図  
(三重県・朝田寺蔵)

解説は24ページ

題デザイン・桑山弥三郎  
カット・林美紀子

## もくじ

文化庁に勤めることについて  
三浦朱門 4

日本語教育と簡約日本語  
野元菊雄 6

### △随 想

外国人の漢字学習  
その方法と問題点(その1)  
W・A・グロータース 10

### △報 告

国語審議会  
「改定・現代仮名遣い(案)」  
(仮名遣い委員会試案)を公表 12

### 文化庁ニュース

- 文化庁著作権課に企画調査室誕生  
技術開発等に対応した著作権制度の整備を推進 17
- 映画、音楽、演劇等に係る入場税の免税点引  
上げについて 17
- 昭和60年度芸術家国内研修員決まる 17
- 移動芸術祭春季公演計画 18
- 重要有形民俗文化財の指定  
—文化財保護審議会の答申— 19
- 史跡の指定等 —文化財保護審議会の答申— 21
- 国宝・重要文化財(美術工芸品)の指定  
—文化財保護審議会の答申— 22
- 「中国からの帰国者のための生活日本語II」完成 24

### △展 覧 会

特 別 展  
山岳信仰の遺宝 25

アービング・ペン写真展  
—エレガンスの魔術師— 25

町並紹介シリーズ① 妻籠宿・奈良井宿 26

地域文化活動紹介シリーズ②③ 香川県内海町 28

国立劇場ニュース 31

# 文化庁に勤めることについて



三浦 朱門  
(文化庁長官)

毎年四月、日本のあらゆる組織は、三月に送りだした先輩の代わりに、新しい人を迎えられる。文化庁でも同じであって、この四月に希望と不安に胸を躍らせながら入庁する人々がいる。私はその一人である。

組織に入った新人はまず、先輩の指導の下に、組織の現状とそのような現実を作ってきた歴史を学び、自分のなすべき仕事をそこに見いださねばならない。

反面、新人は三月に去った先輩の単なる代用ではない。もし新人が旧人の代用に過ぎないなら、仕事に熟達したベテランが辞めて、何も知らない新人が組織に入ることには不経済そのものである。新人が登場するのはそれなりの意味がなければならぬ。

新人は組織の中に新しい問題を持ちこむ。それは本人が意識することもあるだろうが、多くの場合は先輩がその問題性を引き出すの

衛のために率直には言いにくくなるかもしれないが、まだ新米なるが故の蠢勇をかりて、文化庁の仕事について外側から眺めていた当時の感想を述べてみたい。

最大の問題は国民が文化庁の仕事と自分たちの生活に何のかわりもないと感じていることである。

文化庁が文化財を保護し、伝統芸能、あるいは純粋すぎて自立しない芸術を助成していることは、多くの国民が知っている。しかしまた、保護された文化財や国費で助成された芸能、芸術が関係者の間で享受されても、それらは一般人の生活とは無縁であって、率直に言って、文化庁は特定の人々——特権的階層といってもよい——のためにのみ存在しているという感覚がある。勿論、これは事実ではない。文化庁は国民のために国費を使って業務を、それも有効に能率的に遂行しているのである。それなのに個々の国民から自分たちとは無関係な役所と誤解されるについては、それなりの原因がある。その一つの例を高松塚古墳の発掘に見ることが出来る。

およそ、文化財については、維持、保存と共に公開、普及の仕事がある。しかし日本の従来のやり方は維持、保存に力点を置くあまり、国民への公開、普及の努力に欠ける感

みがありはしなかったらうか。遺跡の発掘が行われて、美術品などが出土

だ。つまり新人はそれとは知らないながら、組織の外の空気を組織にもたらず。それは組織が意図的に採用しようとしても、指の間から逃れてしまう生の空気である。たとえば税務署の職員であるとか分かってはいる者に向かつて、誰が我が家の経済の実体を告白しようとするであろう。たとえ真実めかしたものであっても、それは舞台の俳優が演ずる人物と同じく、演技した真実にすぎない。

しかし新人は内部の人間になったとはいながらも、内容においては事実上は外部の人間と同じである。組織は新人を通して、組織が対処する外部の状況を感じしうる。組織が旧人を送りだし、新人を迎えるのは、生物が大気を呼吸するのに似た、組織の維持、発展のために必要な生理なのだ。

新人である私は、文化庁が対処しなければならぬ文化現象、及び、国民一般のサンブ

すると、本物を見ることが出来るのは専門家だけ、というのは、一般国民の偽らざる感想であろう。日本とヨーロッパとは気候や顔料が違うから、同一に論ずることはできないかもしれないが、イタリアなどでは二千年以上昔のローマ時代の絵画も現物を展示している。日本の高松塚古墳の壁画は、一般は模写や写真でしか見ることができない。そして本物は人目に触れることもなく、後世に伝えられるのである。外気や日光に触れても、破損しない技術の発達を待つ、というのである。もし高松塚古墳の壁画が本当に民族の宝なら、国民が誰でもこの精髓に接しうるような方法を講ずべきである。

勿論、夢殿の救世観音も秘仏として厚く布で巻かれていたからこそ、長い年月を破損を免れて、フェノロサの目に触れたのだが、もし布をほどくという決断がなければ、それは存在しないのと同じなのである。

公開や普及に消極的なのは国民の文化や芸術を受容する能力を信じていないからではないだろうか。そして芸術とか文化の発展には専門家を中心に考えればよいという安易さが潜んでいる。しかし素人を軽蔑するのは誤りである。「風と共に去りぬ」を書いたマーガレット・ミッチェルは、生涯で事実上この一作しか書かなかった、あるいは書けなかった。歴史学者であった父親から聞いた

ルとして入庁する。庁の職員諸氏は私という見本を通じて、各部の職務に必要な情報を採取して欲しい。文化庁の人間になった以上、私は喜んで諸氏の解剖実験の標本になるつもりである。もし必要なデータが得られなかったなら、標本の選択が誤っていたためだが、その責任の半ばは私を選んだ文化庁という組織にある。同時に標本になれると自惚れた私の責任も追求されねばなるまい。

しかしまた職員諸氏に、何故、私という標本が必要だったかを考えてもらいたい。

これまでは文化庁の内部にストックされていた文化行政のノウハウで事を処理して過ちはなかった。このノウハウは従来通りの仕事をししてゆく限り、外部から私という汚れているかもしれない空気を、中枢部に導入する危険を犯さなくとも、職責を全うするだけの安定したプログラムを持っているのである。しかしこのままでは文化庁の仕事はジリ貧になるといって危機感が関係者の間に芽生えてきたのに違いない。それでなければ、官庁の仕事に無経験な人間に、重要なポストをまかせようという声此起彼伏が起る。

危機感の内容が何であるかは、職員諸氏は多少とも意識しているはずだが、なまじ生え抜きの内部の人間では、組織の否定につながるだけに口にくい性質のものである。私にしても入庁して半年もたつと、組織の防

南北戦争前後の物語が、新聞記者上りの家庭婦人にこの作品を書かせたのである。勿論、彼女も出版社も別の作品を書こうとし、書かせようとしたのだ。しかし彼女は第二作は書けなかった。つまり彼女は偉大なアマチュアだったのである。

現在の日本の教育は図抜けた人材を生むことには失敗したが、国民の平均を世界有数のレベルに到達することに成功したとされる。この相対的に高い教養をもつ国民は、戦後の高度経済成長時代をへて、本當の豊かさ、つまり文化的な高さへ向かおうとしているようにみえる。文化遺跡への大量の観光客、あらゆる芸術活動への挑戦や生活技術の向上への努力、教養を磨く機会への積極的参加などによってそれを感ずることが出来る。

今日、文化庁がやるべきことは、こういう国民の間に起こりつつある風潮を助成し、人々の欲求に答えることではないだろうか。もし文化関係者が専門家の特権意識の砦にこもって、国民の意欲の高まりを無視し続けるならば、その砦は破られることもなく、人跡稀な深いジャングルの中に忘れられることになる。文化庁はそういう砦をジャングルの中に見捨てようとも、国民と共に文化を愛し、文化財の素晴らしさを楽しみ、そして新しい日本文化を創造する運動の機軸にならなければならぬのである。(三月二十五日記)

編 集 後 記

○去る二月に国語審議会から仮名遣いの改定試案が公表され、現在広く御意見を求めているところで

す。  
○国語は「文化の血液」とも言われますが、野元、グロータース両先生の御指摘のとおり、日本語学習は外国の人々が我が国の文化を本当に理解する近道なのかも知れません。

○四月は役所の年度のお正月に当たりますが、三浦新長官を迎え、ますます本誌を充実したいと思っております。皆様の御協力をお願いします。  
(H)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課  
TEL(03)(二六八)二二四(代表)

「文化庁月報」四月号

(通巻第一九九号)

昭和60年4月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番22号

発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒100東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒100東京都新宿区西五軒町52番地

電話 (03)二六八二二四(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 株式会社印刷所

年間購読料 二、一六〇円(送料共)  
定価 一、八〇円(送料四五百)